

2018年4月29日 川越教会

あなたの居場所

丸山 勉

[聖書] ヨハネによる福音書 10章 14節~18節

わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。

[序]はじめに

早いもので、今年度を迎えたと思ったらもう一ヶ月が終わろうとしています。今月に入って 5 回目の礼拝です。まだまだ毎回毎回の宣教のための準備には苦勞しています。是非、引き続きお祈り他だけますよう宜しくお願いいたします。

普段は「コリントの信徒への手紙一」からご一緒にみ言葉を聞いていますけれども、今日は、私がいつも「ああ、このみ言葉は大切な言葉だなあ」と思っているその聖書の箇所を通してお話させて頂きたいと思っています。それは、私は平日は、FEBC というキリスト教放送局で働いていますけれども、その FEBC の元代表の小林八郎さんが(実は、この 2 月に施設の中で天に召されたのですけれども)、「FEBC の使命とはこの聖句だ」と、スタッフ祈禱会などで幾度も語って下さった箇所なのです。

それは、「囲いに入っていない羊をも(イエス様は)導かねばならない」との主イエス様のみ言葉です。このみ言葉は、イエス様とはどのようなお方なのか、そしてそのイエス様に従うとはどういうことなのか、を強く教えられているみ言葉です。それを一緒に分かち合わせて頂ければ幸いです。

[1] FEBC に寄せられるリスナーからの「声」

私自身のことを紹介するときは、私がずっとスタッフの一人として働いてきた FEBC のこともご紹介させて頂きたいと思うのです。少し今日の週報の巻頭言にも書かせて頂きましたので、そちらも後でご覧頂きたいと思いますが、FEBC はもう 65 年以上も続いているキリスト教の伝道をしている教派を超えた放送局です。

毎月 300 通以上のお手紙やメールを頂きます。もちろんクリスチャンの方も沢山おられますが、まだ一度も教会に行った事のない方の方がずっと多いです。私たち礼拝を捧げている者たちは教会に行くことが普通になっている人が多いかもしれませんが、この日本では、クリスチャンは人口の 1%にも届きません。その中で礼拝生活を送れているというのはそれ自体、奇跡ですね。神様からの大きな恵みです。FEBC を聞いて下さっている方からの郵便やメールでは、毎月必ず、教会に

は行きたいと思うのです、けれども、夫の反対、姑さんの反対、或いは病のゆえに外に元気に出て行く、ということが出来ない、ですから FEBC を通して聖書の言葉を聞いています、礼拝を捧げています、と言われる方がいらっしゃるのです。

FEBC はそのような方々からのお声であるお便りやメールに、全てお返事をしています。放送という一方通行とってしまいがちですが、返信もとても大切な仕事です。「目に見えない教会」がここにあることを思いながら、FEBC のスタッフは仕事をしています。

最近のお便りやメールから 2 通をご紹介しますので頂きたいと思います。

<60 代の男性>

「統合失調症になって 39 年が過ぎました。思うのは日本という国は社会的弱者にとって厳しい国だなということです。私もこの病気になって仕事はしましたが独身を通してきました。そのため身近な人からあらゆるいじめとからかいを受けました。根が真面目で、根性と努力でどうにもなると思っていたように思います。63 才にもなった今、それにも限界があると分かってきました。確かに聖書は神様とイエス・キリストについて書いてあります。しかしこの神様は本当に困った時に呼べば答えて下さる神様なんでしょうか。そこなんです。そこにもう一つ確信が持てないのです。もしそれが持てたなら、統合失調症でも乗り越えていけるような気がするのです。こう書いてきて今思うのは、自分がそう立派な人間ではないと分かってきたことです。しかしだからこそ神様しか頼る方がないのも事実です。イエス・キリストは本当に頼りがいのある方でしょうか。」

<ある女性の方>

「聖書を読むにあたり、疑問があつてメールしました。子供の頃から、マイナス思考にとらわれると逃れられません。過去の聖書を読んだ経験から、また読んでも、結局自分の考えのままなのではと思ってしまうのです。「信じきれない私をお助け下さい」と祈って、結局信じきれないままなのです。「ゆだねきれない私をお助け下さい」と祈って、ウダウダ心配していたりもします。布団の中で、神様に不安な気持ちをお話ししたりします。でもお話ししても、何もゆだねてないし、心配を抱えたままなのです。聖句を信じきる、神様に任せるという決断が必要でしょうか？ 神様は無理に私の意思を変えられないと聞きます。だけど、いつまで待っても、自然には意志は変わらない気がします。」

私は、どちらも信仰を求めるが故の真摯な問いだと思いました。もしかしたら、私たちがいつの間にか忘れかけてしまっているような、自分自身の内面の問いかけが聞こえてくるような気がします。

[2] 信仰は私たちの努力で得られるのか？

ここに聞こえてくるのは、「信じたくても信じられない」という悲しみであり、苦しみです。「みんなのように信じる事が出来たら楽なのに、どうして自分にはそれが簡単なことではないのだろう…。私は結局、信仰を持つことなど出来ない人間で、神様から選ばれていないのではないか。」

私たちクリスチャンはこのような方にどのようにお答え出来るのでしょうか？

ここで問われていることはどういうことなのでしょう？

「それは不信仰との戦いだよ」と言って、簡単に済ませられたら楽なのかもしれませんが、どうもそうではないと思います。

考えてみたいと思います。私たちは、そもそも自分の力、自分の努力、自分の悟りのようなもので、イエス様を「主」として告白できたのでしょうか？ そうではないのではないのでしょうか？

私たちは先ほどのお便りのように、時に、自分自身の弱さを突きつけられて溜息が出ると言いますか、絶望的な思いになり、自分と神様とは繋がれないのだ、自分はダメだと、自分を見つめれば見つめるほど、そう思ってしまう。

けれども、イエス様は、私たちに、何よりもまずイエス様の方から、「私は良い羊飼いです。わたしは羊を知っている」とおっしゃって下さっているのです。私たちは、自分がどんな者であっても、迷いやすい羊のような者であっても、イエス様に知られているのです。

そう言われても実感が持てない、ピンと来ない、ということがあると思います。

そうですね、信仰と言うのは思い込みとは違いますからね。無理もないと思います。とても自分は、その羊飼いに飼って頂いている羊たちの群れからは、外れている存在としか思えない、ということもあると思います。

実は、イエス様は、——私は敢えて言いたいと思いますが——そのあなたのことを無視しないどころか、そのあなたと繋がりがたくて仕方がないお方だと思うのです。

なぜそんなことを言うかと言いますと、イエス様はこのようにおっしゃっているからです。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。」(10:16)

[3] 囲いに入っていない羊のためにこそ！

「この囲いに入っていない羊」もわたしは導かねばならない、とイエス様はおっしゃっています。以前の口語訳では「囲いにいない他の羊」となっていました。

私は今回ここを読んでいて、ハッと思ったことがありました。それはイエス様の心です。なぜ、イエス様は、まるで付け足すようにして「この囲いに入っていない羊」と言ったのだろう、と考えていた時、いや、これは付け足しなんかではなくて、むしろそのことをこそ一番おっしゃりたかったのではないかと。

どうしてそう思ったかと言うと、例えば校長先生でも社長さんでもいいのですが、訓辞とか、正式に伝えなければならないことをまず言いますよね、そしてその後で言わばホンネを語る、ということがあのように思うのです。確かに先ほど伝えたことも言わなければならないこと、けれどもね、一番言いたいことはこのことなんだと、あとから言う。それは付け加えのようであり、実はその語り手の搾り出すような「ホンネの言葉」なのではないのでしょうか。

放送の仕事をしていても良くあるのです。インタビューが終わったあとに、「さっきは言えなかったけれども、実は今こんなことも考えてまして」と、その人の一番ホットな事柄を語って下さることが少なくありません。

イエス様の心の中の絶えざる痛みと申しますか、いつもその事が頭から離れないこと、それは、囲いに入っていない人たちの存在のことではなかったでしょうか？

そしてイエス様はおっしゃいました。

「その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる。」

彼らが導かれることで、初めて群れは、本当の意味で一つとされるのだ、と。そこでは人間が造ったカベはなくなるのでしょう。イエス様ご自身のみ腕が、そのかいなが、天の国の「囲い」そのものです。私たちをこの神様とのつながりから引き離そうとするサタンの方に勝利されたその「囲い」です。そのために、イエス様は十字架の戦いを戦って下さいました。戦い抜いて下さいました。

「その羊をも導かなければならない」と。

「ねばならない」と言います。英語で言えば「Must」ですね。イエス様のご意志がここで貫かれて、私たち弱い者、罪深い者の身代わりとなって十字架について下さったのです。

ですからイエス様はおっしゃっています。

「だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である」(ヨハネ 10:18)。

考えてみれば、イエス様が十字架に架かれたのは、エルサレムの郊外、いわば「都の外」、「囲いの外」でした。それは、「囲いの外の羊」のところにイエス様ご自分が出向き、罪深い私たち一人ひとりを、神様のもとに取り戻すためだったのではないのでしょうか？

ですから、私たちは、このイエス様のみ腕の中に自分の居場所を見出せば良いのです。安心して、このお方に私の全てをお任せすればよいのです。明け渡せばよいのです。祈りの中で、きっと聖霊ご自身が、あなたをイエス様と結び付けてくださいます。なぜなら、聖霊は、あなたの傍らに寄り添うイエス様の霊だからです。

[4] イエス様が「場所」になってくださる

来週は、礼拝の中で主の晩餐の時を持ちますが、あれも私たちの「居場所」だな、と思うのです。

あの主の晩餐には、文字通りイエス様の愛が溢れています。

イエス様は、パンを「ちぎって」弟子たちに分け与えられました。そして、「これはあなた方のための私の体である。」とおっしゃいました。加藤先生も、主の晩餐の時、その場でパンをちぎっておられましたよね。

イエス様は、ご自分を、私たちに「分け与えて下さった」と言ってよいのではないのでしょうか？ 弟子たちはその時、その行為の意味も良く分かりませんでした。結局このあと、弟子たちは皆、イエス

様の十字架のもとから逃げ出してしまいました。イエスを捨ててしまったのです。イエスは、既に最後の晩餐の時、そのような弟子たちの弱さや罪は十分わかっておられて、その上で、「これはあなたの方のための私の体である。」とおっしゃったに相違ないと思います。

言わば、弟子たちは皆、自ら「囲いの外」に行ってしまったのです。その弟子たち一人ひとりをイエスは追い求めてやまない。それが「これはあなたの方のための私の体である」という、ご自分の体を裂き、分け与える、という行為になっているのではないのでしょうか？

ヨハネ福音書 10:18 で、イエスは「わたしは自分でそれ(命)を捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟である。」とおっしゃいました。

「掟」とあるのは、口語訳では「定め」です。使命、ミッションです。私たちが愛するがために、捨てないがために、十字架でご自分の命をお捨てになる、そのために私は、天の父なる神様のもとから来たのだ、とおっしゃっているのですね。本当にすごいことだと思います。

[結]まことなる羊飼いやイエス様のもとに

弟子たちでさえ、初めから立派な信仰者ではありませんでした。いいえ、立派な信仰者なんて言える人は誰もいないのではないのでしょうか。自分を見れば、とても救いに値しない、それこそ「囲いの外の羊」だと言えない私たちです。しかし、その私たちのことが、イエス様は、頭から離れないのです。「私は彼らをも導く」と、それこそがわたしのアイデンティティーだと言わんばかりに、イエス様は、今、私たちをそのふところの中に招いておられるのだと、私は信じます。

なぜなら、「これらの小さな者の一人でも滅びることは、あなたがたの天の父のみこころではない」(マタイ 18:14)のですから！

ご一緒に、まことなる羊飼いやイエス様のもとに集められた、私たち一人ひとり、一匹、一匹であることをお互いに喜び合いたいと思います。

お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、あなたのお名前を賛美いたします。

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。」

あなたは十字架で、私たちすべての者をその救いの中に招いて下さいました。そして、イエス様のよみがえりによって、そのことが神様のみわざとして確かなこととなりました。そうであれば、もう私が「囲いの外」だと思う必要はありません。あなたご自身が、私たちの中に住んで下さるのですから、私たち自身がどのような弱さを抱えていても、私たちはあなたのものです。

どうか、愛と憐れみに満ちたあなたのみわざを受け入れる信仰をお与え下さい。自分で自分を断罪することなく、あなたのふところの中に飛び込んでいくことができますように！

このあなたのご愛を、教会を通し、また私たち自身の存在を通してもお伝えする者として下さい。

聖霊を注ぎ、そして用いて下さい。

今、体の弱さを覚えておられる方に、特にあなたの平和と癒しをお与え下さい。皆さんの祈りに合わせ、救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。